5 月 22 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　16： 12 – 24

「悲しみは喜びに変わる」

御国を継ぐ望みが与えられていることは、確かに私たちの生きる希望です。しかし同時に、それだけでは現実の荒波に立ち向かえないと思っていることもまた事実でしょう。未来に約束された希望だけでは満足できず、インスタントな救いをも求めてしまうのが私たちなのではないでしょうか。

弟子たちにとって復活のイエスははっきりとした希望でした。元々、イエスと共に歩むことで弟子たちは十分満足していました。ところが、十字架によって一度はその喜びが取り去られてしまったのです。そのイエスが、再び共に歩んでくださる。失われたはずの喜びがまた戻ってきた。それだけで全てが満足でした。そして、願いを一つ残らず叶えてくださると期待していました。

ところが、復活されたイエスは再び天に昇られるというのです。それは弟子たちを十字架以前の不安へと揺り戻させるに十分な言葉でした。せっかくもう一度喜びの時が戻ってきたというのに、目の前から希望が取り去られれば、元の木阿弥ではないか、と腹立たしく思う者もいたはずです。

イエスはそのような弟子たちに聖霊の注ぎを予告されます(「……真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。……」ヨハネによる福音書 16:13)。

たとえイエスの姿が見えなくなったとしても、聖霊によってイエスと共にある幸いを実感できる、と言われます。そればかりでなく、聖霊は、弱さを抱える弟子たち一人ひとりの痛みに寄り添い、助けてくださる存在です(「“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。」ローマの信徒への手紙 8:26)。

イエスを失っては元も子もないと思っていた弟子たちに、その約束はまた新たな光を投じます。目に見えない希望を忍耐して待ち望む強さを獲得していくのです(「わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」ローマの信徒への手紙 8:25)。

その強さとは、委ねる強さです。

旧約聖書の昔、族長アブラハムは神と対面し、直言する強さを持っていました(「アブラハムは答えた。『塵あくたにすぎないわたしですが、あえて、わが主に申し上げます。』」創世記 18:27)。祈る言葉を持っていました。しかし、アブラハムと比較するまでもなく弱い私たちはそこまでの力も言葉も持ち合わせていません。自らが直面する苦難に際して祈る言葉さえ出てきません(「わたしたちはどう祈るべきかを知りません」ローマの信徒への手紙 8:26)。だからつい、神ならぬものにすがろうとさえしてしまうのでしょう。安易でインスタントな救いの言葉に惹かれてしまうのでしょう。

それでも、私たちの心には神に対する真実の言葉があるはずです(「……心には真実の言葉があり」詩編 15:2)。それはうめきのようなものかもしれません。聖霊はそのような言葉にならない言葉を掬い上げて、神に執り成してくださるのです(…… “霊” 自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。」ローマの信徒への手紙 8:26)。それだけに留まらず、神の御許におられるイエス自身が執り成してくださるというのです(「……あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。」ヨハネによる福音書 16:23)。その聖霊に、そのイエスに全てを委ねることによって、私たちもまた強く生きることができます。

確かにイエスの言葉通り、地上におけるイエスの姿は見えなくなるでしょう。しかし、それは永遠の別れではなく、永遠の悲しみでもありません。むしろ、喜びの始まりであり、永遠に続く救いの約束の成就なのです。

「その悲しみは喜びに変わる」(ヨハネによる福音書 16:20)

インスタントな救いが実現しないという自分中心の悲しみから、確実に約束された未来を待ち望む神中心の喜びへと、弟子たちは変えられました。今また、私たちもその道へと招かれているのです。